

津市に佐伯惟定の

旧跡を訪ねて

さとうたくみ

(会員 佐伯市池船町)

三月初旬、史談会員・天徳寺の川野晃斉君が上京するといので、にわかには思い立って三重県津市まで便乗させてもらうことにした。藤堂高虎の家臣となった佐伯惟定の旧跡を訪ねるのが念願だった。

三月三日午後五時に立出して佐賀関から三崎に渡り高松で一泊、四日は明石海峡大橋を渡って大阪から伊賀上野を過ぎて津市内に入ったのは午後五時過ぎだった。

目的地の一つ「四天王寺」の案内標識が見えたのでそのまま直行したが、着いた時には暮れかかっていた。私は遠慮して墓地のあたりをウロウロしていたが、晃斉君は本堂前で読経して、庫裡に入り住職を伴って来た。事情を説明すると書斎に招かれ、話を伺うことができた。



▲四天王寺山門

(市指定文化財)

四天王寺住職と

川野晃斉君 ▼



「佐伯氏の墓地は境内の高台にあること。無縁墓になっており区画整理で寄せ墓にしたこと。佐伯朗氏が訪ねてきたこと、佐伯氏についての情報が欲しい」等々。

寺を出た二人は市内で食事をし、私は四天王寺そばの宿へ晃斉君は東京へと立出した。

四天王寺と佐伯氏墓地

本寺は塔世山四天王寺と称し、曹洞宗の中本山。推古

天皇の勅願、聖德太子の建立と伝えられ、境内から奈良時代の古瓦が出土する古刹である。

平安後期の薬師如来坐像、鎌倉時代の聖德太子画像、江戸時代の藤堂高虎・同夫人画像が重要文化財になっている。境内には織田信長生母の墓、藤堂高虎夫人の墓、芭蕉翁文塚などがある。(四天王寺パンフレットより)

昭和四十五年に四天王寺を訪れた高木嘉吉先生は、佐伯史談六十四号に「佐伯惟定の墓を尋ねて」と題して探訪記を発表されている。佐伯氏墓地の配置図と何基かの戒名を写して帰られたが、この中に惟定の墓は見当らなかった。当時すでに無縁墓地となつて荒れていたという。

(下図)

その後平成二年(第一五六号)に神奈川県在住の司哲郎氏から「津藩佐伯権之助家風聞」の寄稿があり、翌三年(一五八号)には東京都在住の佐伯朗氏から「考察・佐伯権之助家」の寄稿があつた。

これによつて佐伯惟定以降(権之助家)の系譜を概略知ることができた。佐伯朗氏は四天王寺の墓地にある人物名を洗い出し、墓石のない人物名も紹介しているが、

佐伯氏墓地・墓石配置図(佐伯史談六四号)



① 元禄三庚午年八月十一日
洞嶽院殿海翁了性居士

大神嫡氏佐伯権佐惟信

② 寛政二年庚戌六月 日
岱嶽院玉雲奇峰居士

八代目大神姓佐伯権佐惟亮

③ 享保十八癸丑年正月初十日
梅嶽院殿天啓浄真居士

大神姓嫡氏佐伯真記惟英

④ 寛政二年庚戌十月十三日
雲嶽院殿快嚴惟慶居士

七代目大神嫡氏佐伯権佐惟徳

(以下略)

我々の求めている佐伯惟定の墓、それに続く惟重、惟寿の墓がここにはないのである。

墓地を訪ねて

翌朝小雨の中を四天王寺の墓地へ向かった。昨夜住職から教えられた道を高台へ上っていくと、目印の阿弥陀如来像が見え、その上の開けた場所に寄せ墓があった。中で最も大きな墓石に「大神嫡氏 佐伯権佐惟信」の文字が見え佐伯氏の墓地とわかった。



緒方家譜（下欄）によると惟重の子惟寿が早世し、権之助家は断絶したが、藩主高次は惟定の外縁にあたる藤堂采女家の次男にその名跡を継がせた、それが惟信である。

それにしても惟定以下三代の墓石がないのは何故だろう、もともとここには無かったのか。惟寿は寛永二十一

〔東宇和郡緒方家譜〕

惟定（佐伯太郎 右京 権亮）

慶長十三年高虎主伊州転封之日 惟定從而移徒焉
慶長十九年十一月及 元和元年大坂前後出陣之刻
従軍有戦功 改賜秩祿四千五百石
元和四年戊午六月九日卒 干伊勢国阿濃津
諡 功月宗忠

女子 伊賀国上野城代藤堂采女元側室

寛文八年戊申十二月廿五日歿、葬伊賀国西蓮寺
諡 瑞光院

惟重（佐伯権亮）

任藤堂高虎朝臣 同侍従高次朝臣 裏祿四千五百石
寛永廿一年甲申二月九日卒 葬伊勢国四天王寺
法名 峯山大雄

女子 藤堂勘解由氏種室 慶長五年庚子七月十五日歿
惟寿（佐伯修理亮）

寛永廿一年甲申二月二日歿 葬伊勢国四天王寺
惟信（佐伯権亮）

実者藤堂元則男 以惟定外縁 君主高次朝臣命
繼承惟重遺跡 更賜一千五百石
元禄三年庚午八月十一日歿 法名洞嶽院海翁了性

惟貞（佐伯権佐）

享保十七年壬子八月没
法名 峻雲院

惟為 佐伯幸之丞 早世

惟英 佐伯真記

惟晴

惟典

年（二六四四）二月二日に没し、同月九日に父惟重が亡くなっている。惟重四〇代・惟寿二〇代の年令と思われる、単なる病死だったのか、あるいは故意に断絶させられたのか、戒名には院殿号も付されていない。惟信が先代の墓を建てなかった理由が何かあるのかも知れない。

江戸初期の墓は五輪塔だったと思われるので、境内の五輪塔を見て歩きながら下ると、藤堂勘解由家の墓地などがあつた。境内の北側は四天王寺幼稚園、西側の丘陵地は開発されて県庁や諸官庁の用地となつている。県立図書館・市立図書館にも立ち寄つてみたが、佐伯氏関係資料を検索する時間もなく諦めた。

津城跡から佐伯町公園へ

津市は県庁所在地でありながら割と閑散とした町に見えた。タクシーの運転手が「全国で下から二番目に人口の少ない県ですから…」また「津城は大した城ではありません、石垣も低く貧弱だし、伊賀上野城の方が立派です」という。

たしかに津市は戦災を受けたためか城下町らしい所が目にかからない。津城跡の内堀も一部を残して埋め立て



▲津城三重隅櫓



津城石垣と内堀▼

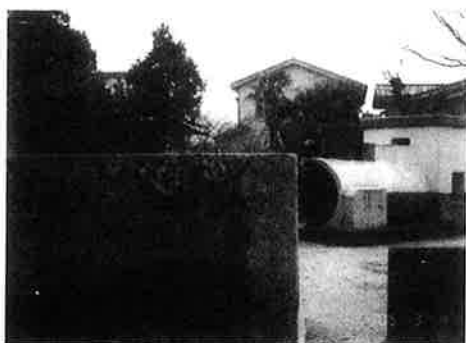
られ市庁舎などの施設に取り囲まれて、ちょうど大分市の府内城を見るイメージに近い。

津城から丸ノ内を歩いて藤堂家の菩提寺寒松院を訪れた。かつては隆盛を誇つたこの寺も明治になって藤堂家が離壇し、昭和二〇年の戦災に焼失して今は見る影もなくなつている。しかし境内には藤堂高虎はじめ歴代の見上げるような堂々たる五輪塔が並んでいる。

佐伯藩毛利家の墓と同様式で大きさも甲乙つけがたい。



寒松院の藤堂高虎の墓



佐伯町公園



旧佐伯町の標柱

この大藩と肩を並べるような墓を築いた毛利家も大したものだと感服した。毛利家墓地とは違って平地にあり、公園のように解放されているのが有り難い。

ここから岩田川を渡って旧佐伯町へ向かう。新住居表示は岩田町となり旧地名の名残は佐伯町公園だけである。途中の書店で津市発行の「歴史散歩」（これは市報に連載したもの）を総編集したもの（と教育委員会発行の「津市の歴史散歩」を買った。二冊で五〇〇円也「安いなあ…」オバちゃんに佐伯公園の場所を聞くと「小さな公園で何

もありませんよ」と教えてくれた。

小さな児童公園の門柱に表示された「佐伯町公園」の文字、敷地の一隅に建てられた御影石の標柱。これを見るだけで旅の目的は達せられた。

旧町名 佐伯町

由来 藤堂高虎が伊予国今治から転封になったとき、今治から随従してきた佐伯権之助がこの地を拝領したことに由来する。佐伯氏のもと豊後国の名門豪族であったが高虎の家来となり、家臣の長田氏・高畑氏・衛藤氏らとともにこの地に住んだ。

大阪住吉大社の常夜灯



伊勢から大阪に戻り住吉大社に寄つて、佐伯の網方中が寄進した常夜灯を写真に撮つて帰りました。
 (一部写真判読できず残念)

【右端一基】(一七二二)

永代常夜灯

正徳三癸巳次歲六月吉日
 豊之後州海部郡佐伯莊海上安穩?
 大坂願主 天□□□三郎兵衛
 取次 山上金大夫

【左一对】(一七四六)

永代常夜灯

延享三丙寅年九月吉日
 願主 大坂新天満町 天満屋七郎兵衛
 執次 山上金大夫

諸国
 物網方中
 惣船持中
 惣商人中

(上段正面)

石工
 大坂伏見通
 和泉屋
 甚兵衛

(下段左面)

世話人中
 石田吉左衛門
 吉郎衛門
 善右衛門
 治兵衛
 松三郎
 彌太夫
 松太夫
 吉郎兵衛
 五三郎
 吉次郎

(中段正面)

世話人中
 代後浦
 鶴野小兵衛
 同千五郎
 同万三郎
 同小助
 鶴野兵左衛門
 同小太夫
 同小四郎
 同甚七
 鶴野三右衛門
 左兵衛
 三之丞

(中段正面)

豊後国佐伯
 塩津浦
 紀州下津浦
 日向国延岡
 毛見浦
 日向国延岡
 方材嶋
 土々呂浦
 網細嶋
 宇和嶋
 伊予国岩城
 吉田
 豊後国佐伯
 落野浦
 鳩野浦
 網代浦
 福良浦

(中段左面)

豊後国佐伯
 浅海井浦
 日見浦
 津久見浦
 大嶋浦
 間越浦
 無風浦
 津井浦
 浦戸浦
 保戸浦
 雲泊浦
 江野浦
 宮野浦
 色利浦

(中段左面)

豊後国佐伯
 桑野浦
 荒網代浦
 片神浦
 高松浦
 小寄浦
 梶寄浦
 日野浦
 沖松浦
 地松浦
 石間浦
 守後浦
 日向泊浦

(中段右面)

阿波国
 海部頼浦
 安芸国尾道
 備後国鞆津
 土佐国須崎浦
 下茅浦
 蒲代塩内浦
 佐賀国鶴屋
 豊後国佐伯
 内野越浦
 笹良目浦
 宮野内浦
 古江浦
 夏井浦
 長田浦

(中段右面)